

## 「ごんぎつね」の授業化のための教材研究

鎌倉 博

(名古屋芸術大学 教育学部 子ども学科)

### 1. 本稿のねらい

筆者が研究活動のために所属している日本生活教育連盟(以下日生連)の愛知サークル担当者から、「若い小学4年生の担任が『ごんぎつね』で授業をするので、そのヒントになる話をしてほしい」との依頼があった。そこで、各地区採択の国語科教科書を使って授業していくことを前提にしている現在の日本の学校教育体制の中でも、教科書指導書通りではなく、教材で獲得させたい事柄や、子どもたちの学習実態や学習要求に基づいて授業していくことが、「カリキュラム・マネジメント力」を育む教員に成長していけることになるとの自身の教育経験も踏まえて、レジュメを準備して講話した。本原稿は、そのレジュメを本年報用に文章化し、「研究ノート」の位置づけで寄稿するものである。

### 2. 教科書での扱い

全国の小学校では、2020(令和2)年度から新たに文部科学省検定に合格した教科書を採用している。国語科では4社が発行している。

新美南吉(以下南吉)の「ごんぎつね」は4社全ての4年下の教科書に掲載されている。しかし、各教科書会社にはそれぞれの編集方針があり、担当する委員も異なる。そのため、同じ南吉作の「ごんぎつね」であっても扱い方が違う。各社がホームページ上で公開している指導計画例の「単元のねらい」「単元授業時間数(なお、各項目の時間数が明確になっていない社のものは筆者が判断した時間数である)」「およその展開」を以下に示す。

東京書籍 「読んで考えたことを伝え合おう」

<13時間(読10書3)>

- 1 単元の学習の見通しを立てる(1時間)
- 2 「ごんぎつね」を読み、ごんと兵十の気持ちを考える(9時間)
- 3 物語を読んだ感想を友達と伝え合う(2時間)
- 4 単元の学習を振り返る(1時間)

教育出版 「場面のうつりかわりと結びつけ、登場人物の変化を読もう」

<8時間(読6書2)>

- 1 登場人物を確認し、作品の全体像をとらえる(1時間)
- 2 ごんと兵十の心の動きを読む(2時間)
- 3 償いを始めるきっかけとなったごんの想像の理由を考える(2時間)
- 4 ごんと兵十の心のつながりについて、思ったことをノートにまとめる(1時間)
- 5 この物語のおもしろいところや工夫されているところをお薦めするポスターを書く(2時間)

光村出版 「気持ちの変化を読み、考えたことを話し合おう」

<12時間(読12)>

- 1 登場人物に焦点を当てて読み、初発の感想を書く(2時間)
- 2 教材文を読み、登場人物の行動や気持ちの変化を捉える(5時間)
- 3 詳しく読んで分かったことをもとに、物語や登場人物についての考えをまとめる(2時間)

- 4 考えたことをグループで交流し合い、友達の考えと比べながら、自分の考えを深める (1時間)
- 5 南吉について知り読みたい本を見つけブックトークする (2時間)

#### 学校図書「人物の関係と気持ちの変化を読もう」

<10時間(読10)>

- 1 全体を読み、めあてを確かめる (1時間)
- 2 初発の感想を交流する (1時間)
- 3 場面ごとに題を付け、全体を捉える (3時間)
- 4 人物の性格や気持ちと、その変化を捉える (1時間)
- 5 視点の変化とその効果を捉える (1時間)
- 6 最後の場面の人物同士の思いを捉える (1時間)
- 7 終わり方の表現の効果を考え、作品全体のメッセージを共有する (1時間)
- 8 学習の振り返りをする (1時間)

各教科書発行会社が作成している年間指導計画例を参考に、教科年間指導計画を作成している学校が多い現実がある。授業者の学校がどこまでその授業時間数や展開に従わざるを得ないのかを確かめた上で、「目の前の子どもたちと「ごんぎつね」でどのような授業を展開したいのか」という授業者自身のねらいをしっかりとって授業構想していくことが大切である。

### 3. 「ごんぎつね」という作品

#### (1) 「新美南吉」という人

新美南吉の生涯を概括すると、以下のようである。

- 1913年 豊屋の父渡辺多蔵と母りゑ(旧姓新美)の次男として生まれた  
前年に生まれ18日後に亡くなった長男「正八」の名を受ける
- 1917年 病気がちだった母が29歳で死去する
- 1919年 父が酒井志人と再婚 異母弟誕生
- 1920年 半田第二尋常小学校入学

- 1921年 新美家に養子縁組させられ母方の祖母志もとと二人暮らしになる  
寂しさからとされているが正八は父の元に帰る(籍は新美のまま)
- 1926年 尋常小学校で「知多郡長賞」「第一等賞」をとって卒業したとされている  
「先生になれる」と担任が父親を説得し半田中学校に入学したとされている
- 1928年 児童文学に目覚めたとされ雑誌投稿するようになる  
その際ペンネームとして「南吉」を名乗る  
北原白秋『赤い鳥童謡集』を読んで感銘を受けたとされている
- 1931年 半田中学校卒業  
岡崎師範学校を受験するも不合格  
代用教員として半田第二尋常小学校に赴任する  
教員生活の傍ら童謡を創作・投稿し続け『赤い鳥』に初めて掲載される  
この頃北原白秋や与田準一らと関係をもつ
- 1932年 『赤い鳥』に「ごん狐」が掲載される  
東京外国語大学に入学  
白秋の指導を受けながら創作を続ける
- 1933年 白秋が鈴木三重吉と大喧嘩し絶縁したため『赤い鳥』投稿を辞める  
その後発表の場に恵まれず
- 1934年 結核を患う
- 1936年 東京外国語大学を卒業するも不景気で不本意な就職をする  
2度目の結核で体調がすぐれず帰郷する
- 1937年 代用教員や畜禽研究所を転々するも教員免許状を取得する
- 1938年 安城高等女学校に赴任する
- 1940年 交際していた中山ちゑが急死で「腑抜けのような状態だった」とされている
- 1941年 創作作品が再び掲載されるようになる  
初の単行本『良寛物語 手毬と鉢の子』を発行する

- 1942年 初の童話集『おぢいさんのランプ』刊行  
腎臓炎を患う
- 1943年 再び結核を患う  
安城高等女学校を退職し帰郷する  
結核で亡くなる（享年29歳）

以上のように見てくると、「貧乏」「最愛の人の死」「病」「一人ぼっち」等のキーワードが見えてくる。南吉のこのキーワードに象徴される人生が、「ごんぎつね」という作品にも大きく影響をしたものと考えられる。

## (2) 教科書の「ごんぎつね」

- ① 元猟師の口伝として存在したオリジナルの『権狐』があった（口伝が事実かは定かではないが「ごんぎつね」ではそのように紹介されている）
  - ② 新美南吉がその口伝を物語にまとめ草稿の『権狐』を執筆した（原文は『校定新美南吉全集』（大日本図書）10巻にある）
  - ③ 南吉の『権狐』に鈴木三重吉が手を加え題名も『ごん狐』として『赤い鳥』に掲載した
- 4社の国語科教科書では、この③を「ごんぎつね」として掲載している。なお、同じ作品とされている場合でも、『おおきなかぶ』のように文章表現が異なる（内田莉紗子訳と西郷竹彦訳の違い）ことがある。そこで、念のため4社の文章表現を確認したが、新出漢字の配当に合わせて漢字表現にしているか、ひらがなのままとしているか、句点をつけているか、外しているか、段落替えをしているか、していないか程度の違いで、文章としての表現の違いはなかった。
- しかし、読みのイメージを補助する挿絵は4社で全く違う。

### 東京書籍 絵：黒井健

「いたずらしようとしているごん」「川辺を歩くごん」「びくから魚を放り投げようとしてい

るごん」「鰻に巻き付かれたごん」「葬式の列を見るごん」「麦をとぐ兵十を見るごん」「鯛売りの籠から鯛を盗んだごん」「栗を届けに来たごん」「加助と話す兵十を見つめるごん」「再び栗を届けに来たごん」「撃たれたごんと撃った兵十の姿」の11枚。ごんにしろ兵十にしろ、顔の表情があまり見えない。ごんの行動を中心に描き出している。

### 教育出版 絵：牧野千穂

「ごんの姿」「川で網をかける兵十」「葬式の列を見るごん」「兵十に鯛を届けるごん」「加助と話す兵十を見つめるごん」「ごんに向けて銃を構える兵十」の6枚。グレーをベースにし、ごんをオレンジ、萩・彼岸花・唐辛子を赤、葬式の装束・夜の月の白を浮き立たせようとしている感がある。

### 光村図書 絵：かすや昌宏

「洞穴の中のごん」「川で網をかける兵十を見つめるごん」「鰻に巻き付かれたごん」「葬式の列を見るごん」「鯛売りの籠から鯛を盗もうとするごん」「栗を届けに来たごん」「加助と話す兵十を見つめるごん」「ごんが入り込むのに気づいた兵十」「撃たれたごん」の9枚。全体として鮮明な色合いで描き、特にきつね色のごんのごんの目に表れる表情が印象的である。

### 学校図書 絵：松永禎郎

「ごんの姿」「川で網をかける兵十を見つめるごん」「びくから鰻を取り出したごんと追いかける兵十」「葬式の列を地蔵の陰から見るごん」「籠から鯛を盗むごん」「加助と話す兵十を見つめるごん」「ごんが入り込むのに気づいた兵十」「撃たれたごんと銃を落とす兵十の姿」の8枚。全体的に淡い色合いで描いている。ごんのみからは表情が見えない感がある。

絵本と違い、教科書で授業する際には、挿絵はあまり重視されていない。

以上を踏まえると、自校で使っている国語科教科

書をそのまま教材とすることで問題はない。

### (3) 「物語」という文学は

「物語」の文学的価値を教材研究する際には、筆者は以下の点で教材分析してきた。

- ① どのようなテーマ性があるか（作者の作品の動機であり思想が込められている）
- ② 登場する人物が魅力的であるか（自分が同化してしまうようであるか）
- ③ ストーリー性が楽しめるか（次はどうなるのかというハラハラドキドキと読み進められるか）
- ④ 個々の文学表現が豊かであるか（場面や人物のイメージ、情感等が膨らむ表現がいかにかき込まれているか）

以上を踏まえて、筆者なりの教材解釈を以下でまとめてみる。

### (4) 人物描写

口伝したとされる茂平や、兵十に関わる人物も登場するが、ここでは中心人物としての「ごん」と「兵十」に絞る。

- ① ごん
  - ・「一人ぼっちの小ぎつね」
  - ・人里に出てきて「いたずらばかり」
  - ・しかし、「あんないたずらをしなければよかった」と後悔し、「つぐないに」兵十のために「いいこと」をしようとした優しさも描写されている。
- ② 兵十
  - ・当初は「おっかあと二人きり」
  - ・おっかあが亡くなってごんと「同じ、ひとりぼっち」になった。
  - ・「おっかあにうなぎを食べさせる」ことを考えた母親思いから人間としての優しさがあると考えられる。

・「ぼろぼろの黒い着物」「麦をといでいる」「まぜしいくらし」でありつつも、「おかげでおれは、ぬすびどと思われて」とある。このことから、どんなに貧乏でも他人から盗むようなことは絶対にしない生真面目さを感じる。

3 または4歳で母親を亡くし、いたずら盛りが普通である8または9歳の頃に、母方の新美家に養子縁組させられて「一人ぼっち」を感じて再び父のいる元に帰ったり、父渡邊の元に帰るも南吉は新美のままであったりしたなどの心情が、物語「ごんぎつね」の世界にもかなり反映しているのではないかと解釈される。

いたずら心いっぱいの「ごん」かと思われるごんと、貧乏な生活の上に病に伏す母の看病でも真剣に生きる兵十とを前半では対照的に描き出している。しかし、母を思う兵十の優しさ同様、自分の過ちに気づいて心改めて栗や松茸を届けるごんの優しさを後半では描いている。この対照的から同化していく人物の描き方に、この作品の1つ目の魅力があると考えられる。

### (5) 作品の展開

#### < 1 の場面 >

- ・「ごん」いうぎつねの紹介と暮らしぶり
- ・よく知る「兵十」と川で出会ったごん
- ・兵十が置いていった魚籠で早速いたずらしたごん

#### < 2 の場面 >

- ・兵十の家の葬式に出合ったごん
- ・「あんないたずらをしなけりゃよかった」と後悔するごん

#### < 3 の場面 >

- ・「おれと同じ、ひとりぼっち」と兵十を捉えたごん
- ・「つぐない」をしようと考え鰯を盗って届けたごん
- ・「まず一つ、いいことを」したと思ったごん
- ・ところが「ひどい目にあわされた」兵十を目

にして「しまった」と思ったごん

- ・勘違いされたことを「かわいそう」と思い、次からは盗んだものではない、山で拾った栗や採ってきた松茸を届け続けたごん

<4の場面>

- ・「とても不思議なこと」として兵十が話している様子を聞いていたごん
- ・自分のしていることとして気づいてもらえていないことを感じ取ったごん

<5の場面>

- ・「とても不思議なこと」は「神様のしわざ」という加助の話を聞いたごん
- ・加助が「神様にお礼を言うがいいよ」に兵十が「うん」と答えたのを聞いていたごん
- ・その会話を聞いて「引き合わない」と不満をもったごん

<6の場面>

- ・届けているのは自分と気づいてほしい気持ちを持ちながら再び栗を届けにきたごん
- ・「またいたずらをしに来たな」ととらえた兵十
- ・銃を取り出し「足音をしのばせて」近寄った兵十に撃たれたごん
- ・原文には「うなずきました」は「うれしくなりました」とあったとされている
- ・栗等を届けていたのは自分なのだ気づいてもらえたごん
- ・「とても不思議なこと」はごんがしていたことと気づいて愕然とする兵十

以上のように見てくると、この作品の展開からも、「貧乏」「最愛の人を失う」「養子に出されて一人ぼっち」だった南吉の不遇の人生と重なるドラマが垣間見える。

いたずら心を発揮するごんと生真面目な兵十を対象的に描きながら、「一人ぼっち」になった兵十を目の前にして「おれと同じ」を感じたごんが行動の動機を改めていく展開をとっている。このごんの心の変容の描き方が、この作品の2つ目の魅力にな

っていると考えられる。

## (6) 意識的文学表現

「ごんぎつね」では、以下の3点を特に意識的に表現したと筆者は考える。

### ① 南吉が度々帰郷していたふるさと半田の当時の豊かな風景

- ・茂平という猟師が口伝している設定で書き出している。実在の人物、実在の出来事かは分からないが、日本の各地に「口伝」による継承が見られる。半田にもそのような文化的風習が残されていたのではないかと考えられる。
- ・「中山様」とは中山刑部大輔勝時のことで、確かに半田市中山に中山城があったとされている。その中山城があったとされている所に、新美南吉記念館が建設されている。
- ・いも、シダ、菜の花、唐辛子、薄（すすき）、萩、彼岸花、麦、栗、松茸、榛（はん）の木、無花果（いちじく）の木、鰻、「きす」（海魚のキスではなく川魚の総称と思われる）、鰯、松虫などをふんだんに登場させることで、豊かな自然風景を描いている。
- ・川で漁をする際の道具や姿、秋祭りの風景、葬式の際の装束や女性の独特の化粧、始まりの合図、葬列の様子、吉兵衛の家での法事の様子、海にも近いからこそその鰯売りの登場などに、当時の半田の庶民の姿や風習が描かれている。

### ② 意識的な色表現

- ・「赤い」彼岸花、「赤い」井戸、「ぴかぴか光る」鰯、「光る」お城の屋根瓦、「白い」川魚や鰻の腹、「白い」着物、「青い」煙、「黄色」く濁った川のように、意識的に色表現を書き入れている。
- ・具体的な色描写は書かれてはいないが、想像がつくピンク色の萩、緑鮮やかなシダ、真っ

赤な「とんがらし」、夜の月、「からっと晴れ」  
た「いいお天気」の空なども書き加えている。

### ③ 意識的な音表現

- ・「きんきん」鳴くもず、「キュッ」と鳴いた鰻、「チンチロリン」と鳴く松虫、魚が川に逃げたときの「とぼん」、「ぐずぐず」煮える音、「カーンカーン」の鐘、「ポンポンポンポン」という木魚の音、ごんを撃った「ドン」という銃声、葬列から聞こえるまたは加助と兵十との「話し声」、鯛を「売る声」、「おきょうを読む声」などの音表現を書き入れている。
- ・音は耳に響いて伝わるものとは限らない。おっかあを亡くして「しおれ」たり「ぼんやり考えこんで」いたりする兵十の姿、加助と兵十が「だまって」月夜の晩を歩く描写など、意図的に静寂を印象づける表現も書き入れている。
- ・特に最後の、ごんが兵十に気づかれないように「こっそり」土間に入った描写、銃を持って「足音をしのばせて」近寄る兵十の描写では静寂を印象付けながら、兵十が「ドン」と静寂を破ってごんを撃ってしまう。そのため、ごんは「ばたり」と倒れ、ごんのしていたことに気づいた兵十が同様の擬音描写「ばたり」を使って銃を落とす姿を描いていく。そして、静かに煙が立つ姿も描いて物語を終えていく。静寂と静寂を破る音、そしてまた静寂という動的描写を使っている。

「ごんぎつね」が不朽の名作となっている背景には、以上のような児童文学作家としての南吉のより優れた文学センスが活かされていたと考えられる。これが3つ目の作品の魅力である。

### (7) 作品の主題

「ごん」の素直な心境の変化と行動変容、それを知らずに度々のいたづらに怒り心頭だった兵十の

悲劇の結末のような展開だが、撃たれたごんが「うなずきました」ではなく、草稿では「うれしくなりました」とあることからすると、ごんからすれば悲しくも「自分が届けていたことを分かってもらえた」ことへの満足を描こうとしたと筆者は考える。しかし、これはあくまでも筆者個人の考えである。

作品の主題は作家本人が語らないかぎり本当には分からない。しかし、作家はその読み手の反応こそを楽しむ目的で明かすことは少ないと言われている。どのように主題を読もうか、それは読み手自身が判断することである。授業者が一方的にまとめていくような読み深め方は避けなくてはならない。

大切なのは、表の行為からだけでなく、奥底の思いを受け止める読みを展開していくことである。その点で、東京書籍や光村図書の指導計画例にあるように、どう読み取ったのかを子ども同士で伝え合うことは、「他者の読み取り方からも学ぶ」という観点で意味がある。

### 3. 「ごんぎつね」の授業をどう作るか

#### (1) 「原則は明確に・実践は多様に」

私が代表世話人を務めている日生連ことばと教育分科会では、故川合章日生連委員長の上記考え方を大事に実践研究している。

では、その場合の「原則」とは何かとえば、「国語科の授業では、教材や学習活動を通して、日本語を仲間とともに楽しみ味わい認識・内面・表現・関係も豊かにしていく教育に特化した学習活動を展開していく」ことである。

その上で、本分科会では多様な実践方法を尊重している。

読みの授業に限定すれば、教材によっては「一読総合法」（場面ごとに切り取って読み深め最後に総合して主題を考える手法）を取り入れる場合もあれば、「三読法」（全文を読んで分析視点を整理し改めて読んで深めていく方法）を取り入れる場合もある。教科書を使わず絵本を使う授業もある。かつて、民間教育研究団体連絡会の合同研究集会や全国教

育研究集会の国語教育分科会等において、独自の読みの手法を深めている研究団体参加者同士でどの団体の手法が優れているかで論争していることが多々あった。しかしそれは無用な論争である。それぞれの読みの研究団体が大事にする手法を尊重しながら、授業者はその教材でどのような読みの力を獲得させたいのかによって手法を決めたり、クラス児童の学習実態や学習要求に基づいて手法が形作られたりしていくべきである。本分科会の実践研究では、そうした研究姿勢を大事にしようとしている。

## (2) 「言語活動」を入れざるを得ないのかの判断

東京書籍を使っている学校では「物語を読んだ感想を友達と伝え合う（2時間）」、教育出版を使っている学校では「この物語のおもしろいところや工夫されているところをお薦めするポスターを書く（2時間）」、光村出版を使っている学校では「詳しく読んで分かったことをもとに、物語や登場人物についての考えをまとめ交流する（3時間）」「新見南吉について知り読みたい本を見つけブックトークする（2時間）」学習活動を、指導計画例で紹介している。

国語科における言語活動を一律に否定するような見解に触れることもあるが、ここに示されている学習活動は一括りで否定されるようなものではない。国語科の中の言語活動として批判すべきは、道徳で扱えるような「感謝の気持ちを話そう」（学校図書4年下）、特別活動で扱えるような「もしものときにそなえよう」（光村図書4年下）、社会科で扱えるような「ふるさとの食」を伝えよう」（東京書籍4年下）、総合的な学習の時間で扱えるような「身の回りの「便利」なものを考えよう」（教育出版4年下）のような事例である。

「ごんぎつね」をどのように扱いたいのかは、授業者自身のねらいや授業への考え方をもって判断すべきである。「ごんぎつね」を通して南吉の作品に関連付けていく言語活動は決して無意味ではない。一方で、「読み味わう」「読む力」の育成に専

念いたいのであれば、思い切って言語活動の時間を削って、本単元に充てられている8～13時間の全てを読みの授業に回すこともできる。

## (3) 読みの授業として

読みの授業では一般的に「三読法」または「一読総合法」が活用されている。

### ① 「三読法」での授業

国語教科書の指導計案例では4社とも「三読法」で行おうとしていると考えられる。

私が「三読法」で授業を構想するケースは以下のとおりである。

- ・すでによく知る作品である（「おおきなかぶ」）
- ・理解が難解な作品である（宮沢賢治「やまなし」）
- ・全文を読んで主題を考える作品である（吉野源三郎「君たちはどう生きるか」）

学校図書以外はオーソドックスな「三読法」を採用している。「三読法」とは

- 1) 通読・・・全文を通して人物や展開の大筋を確かめる。  
初発の感想を書いて、読み進め方の目当てを立てる。
- 2) 精読・・・学習計画に沿って詳しく読み深めていく。
- 3) 味読・・・これまで学習したこと全体を踏まえて改めて味わって読む。

以上の一連の学習活動を通して読み深めていく活動である。

その中で特に注目したのは学校図書の指導計案例である。オーソドックスな「三読法」を取り入れながら、「精読」の部分詳しく例示している。

- ・場面ごとに題を付け、全体を捉える（3時間）
- ・人物の性格や気持ちと、その変化を捉える（1時間）
- ・視点の変化とその効果を捉える（1時間）
- ・最後の場面の人物同士の思いを捉える（1時間）
- ・終わり方の表現の効果を考え、作品全体のメ

ッセージを共有する（1時間）

なぜこのような手法を例示しているかという、1つの教材の中で作品分析の多様な手法を獲得させるためである。これはこれで優れた学習法だと考えるが、かなり1つの教材を総合的に読み込めるだけの高い学力を前提にしないと、かえって深まらな

いと考える。

また、この手法を取り入れるならば、南吉の「意識的文章描写」で紹介した

- ・風景描写
- ・色描写
- ・音声描写

に注目させる視点も大事にしたい。

文章表現を味わう学習活動は、「読む主体」から「物語作品を書く主体」に育てる力を育むことになる。

## ② 一読総合法の授業

「ごんぎつね」の場合は、5つの場面で展開が進められていく中で、ごんの心境の揺れを含む変化が描写されている。こうした作品では、「次はどうか」と考えながら読む児童が多い。このような作品の場合には「一読総合法」の手法を使うことは十分に考えられる。

しかし、その場合、以下の準備が必要になることを踏まえておかななくてはならない。

- 1) 最後の場面に至るまでの学習期間は教科書を回収しておく。教科書を手にしていれば、いつでも全文が読めてしまうからである。
- 2) 場面ごとに切り分けた（いくつの場面に切り分けるかは読みの時間にどれだけかけられるかによる）学習プリントが必要である。その学習プリントは、本文はコピーするにしても、構成し印刷するなどの作業は自前でやる必要がある。
- 3) 学習プリントには、児童が読み取った様々な内容（分からないことばのチェック、思ったことなど）が書き込める行間や枠を作っておかなくては意味がない。

4) できれば毎時のプリントを貼り合わせて、1冊の自分本にまとめていけるとよい。

なお、一読総合法で進める場合、1人の子の読みからみんなで考え合っていく場面を十分にとっていかななくては意味がない。その場合、読み進めていくうちに前時までの読みが違っていったことに気づくことがあってもよい。だから、毎時「正答」を求めるような進め方はしてはいけない。まとまらなくても「これからの読みで解決していく」という姿勢で児童の発言を受け止めたい。

また、一読総合法で進める場合、最後の場面まで読み深めてきて終わってしまわないようにしたい。大事にしたいのは、「三読法」で紹介した、心情をとらえて表現読みするなどして「味読」したり、「書き手」に育てることまでを目標にして学校図書「精読」例で紹介したような南吉の文章表現を研究したりすることも取り入れたい。

## ③ 児童にとっての難語

「ごんぎつね」には、「お歯黒」「びく」「納屋」など、現代の子どもたちにはイメージしにくい言葉が出てくる。「何のこと？」という疑問を持つ子も出てきて当然である。

各教科書には欄外に解説があるが、より納得のいく理解を深めるためには、1つには「びく」「納屋」では実物や画像を用意しておく必要がある。

もう1つには、敢えて画像を使わずに児童を納得させる端的な解説を用意しておくことである。かつて小学校教員として「ごんぎつね」で授業をしたことのある筆者が、「お歯黒」の写真を見せた時、「気持ち悪い」とか「なんでこんなことするの？」と、児童の関心がどんどん主活動から離れてしまった苦い経験がある。「児童が実感をもって読む」ことを大切にしようと思っただけのことだったが、画像を使うことの良し悪しは慎重に判断すべきであると感じた。

④「ごん」を主に読む

どの手法で授業展開するにしろ、児童向けの作品を多く創作していた中で南吉がこの作品を作ったこと、「ごんぎつね」という題名からも、「ごん」を主に展開を読むことが大切であると考ええる。

兵十を中心に読むと、兵十への同情論、ロシアのウクライナ侵攻の映像を日々見せられている現代の児童ならば銃で撃った兵十を責めるだけの意見、銃規制を考える物語のように児童が読んでしまいかねない。行為の善悪を話し合うかのような授業になってしまうからである。これでは文学教材を使っ  
ての道徳の授業になってしまう。